

甲賀市の文化財②④

甲賀の芭蕉句碑めぐり



常明寺芭蕉句碑

庵や義仲寺などゆかりの場所が伝えられています。近江の豊かな風土や門人への愛着が感じられる一句です。

●「松茸やしらぬ木の葉のへばり付」玉桂寺（信楽町）

元禄4年（1691）の句で、「続猿蓑」に収められています。

芭蕉は、近江から故郷伊賀への道として信楽路を利用しており、芭蕉を偲ぶ句碑が建てられました。

●「木がくれて茶摘もきくやほととぎす」仙禪寺・個人宅（信楽町）

元禄7年（1694）の句。

茶摘の情景を詠んだもので、茶どころ朝宮ならではの句碑です。

芭蕉句碑のほかに市内には多くの文学碑があります。碑ゆかりの場所を訪ねると、その情景がより鮮明に感じられるようになります。

水口岡山城についての資料を探しています。

水口岡山城（古城山）についての資料をお持ちの方は、当課までご連絡をお願いいたします。

問い合わせ

歴史文化財課
調査管理係

TEL 86-8026
FAX 86-8216

●「いのちふたつ（の）中に活たるさくらかな」大岡寺（水口町）
貞享2年（1685）、東海道を行く芭蕉が、水口宿で旧友の服部土芳と再会したときに詠んだ句で、『野ざらし紀行』に収められています。寛政7年（1795）に、水口俳壇で活躍した加藤蜷州らが発起人となり建てられた句碑です。

●「さみだれに鳩のうき巢を見にゆかむ」常明寺（土山町）
貞享4年（1687）の句で、土山の浮巢社中により建てられました。常明寺の住持で、俳人でもあった虚白は、この句にちなんだ浮巢社で、土山俳壇の指導にあたりました。

●「准仏や皷手合する数珠の音」称名寺（甲賀町）
元禄7年（1694）の句で、『三冊子』に収められています。称名寺境内の「圓光大師廿五拜」碑の側面に刻まれています。准仏とは花祭りのことです。熱心に祈るすがたを詠んだものです。

●「秋山にあら山伏の祈るこゑ」嶺南寺（甲南町）
元禄元年（1688）の句。句碑は平成5年に建てられました。背面には「山陰は山伏村の一かまへ」の句があり、甲賀の山間に点在する里山伏たちの村の情景を詠んだものです。

●「行春を淡海の人とをしみけり」息障寺（甲南町）
元禄3年（1690）の句で、『猿蓑』に収められています。漂泊生活を送った芭蕉ですが近江には幾度か滞在し、幻住

天 平14（742）年、聖武天皇は山背国恭仁京から東北に道をひらき、甲賀紫香楽の地に離宮を造営、翌年には大仏造立の詔を発して、仏教を核とした「理想郷」づくりがはじまりました。さらに同17年には首都としての位置づけがなされながら、あいつぐ天変地異や天皇の急激な変革路線に反対する勢力の活動により、天皇は志半ばにこの地を去ります。

紫香楽宮の造営とその放棄は、古代史上の大きな「事件」であり、また黄瀬・牧地先には早くに国の史跡に指定された立派な遺構がありながら、その実態は謎に包まれ、多くの研究者がこれを解明しようと力を注いできました。幸い旧信楽町時代に中核施設があったと考えられる宮町遺跡が発見され、また新名神高速道路の工事などにより、多くの注目すべき関連遺跡が確認された今日、宮の実態解明に向けた期待が高まっています。

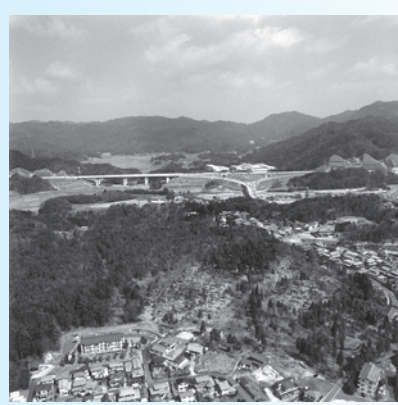
甲賀市史第一巻でもこの紫香楽宮に多くのページをあて、多面

市史の小径

第22回

甲賀に
首都があった

的にその謎に迫ります。
聖武天皇、光明皇后あるいは行基といった時代の主人公がこの地にどんな理想を求め、どう実現しようとしたのか、広い視野からの解説をご期待ください。



史跡紫香楽宮跡から新名神、そして宮町遺跡をのぞむ

問い合わせ 歴史文化財課 市史編さん室
TEL 86-8075 FAX 86-8216